齋藤茂吉全集

第十六巻

# 齋藤茂吉全集

第十六卷

第十三回配本（全三十六巻）
齋藤茂吉全集　第十六巻
定價　千八百圓

昭和四十九年一月十四日　發行

著者　齋藤茂吉
發行者　岩波雄二郎
發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店
印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 齋藤茂太　1974

# 柿本人麿　二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 目次

## 評釋篇卷之上

自序……三
人麿短歌評釋……九
〔卷一・三〇〕過近江荒都時作歌（一）……一一
〔卷一・三一〕過近江荒都時作歌（二）……二一
〔卷一・三七〕幸于吉野宮之時作歌（一）……二九
〔卷一・三九〕幸于吉野宮之時作歌（二）……三六
〔卷一・四〇〕幸于伊勢國時留京作歌（一）……四五
〔卷一・四一〕幸于伊勢國時留京作歌（二）……五〇
〔卷一・四三〕幸于伊勢國時留京作歌（三）……五三
〔卷一・四六〕輕皇子宿于安騎野時作歌（一）……六〇
〔卷一・四七〕輕皇子宿于安騎野時作歌（二）……六五

〔卷一・四八〕輕皇子宿于安騎野時作歌（三）……六九
〔卷一・四九〕輕皇子宿于安騎野時作歌（四）……七七
〔卷二・一三二〕從石見國別妻上來時歌（一）……八三
〔卷二・一三三〕從石見國別妻上來時歌（二）……八七
〔卷二・一三四〕從石見國別妻上來時歌或本歌……九四
〔卷二・一三六〕從石見國別妻上來時歌（三）……九五
〔卷二・一三七〕從石見國別妻上來時歌（四）……九九
〔卷二・一三九〕從石見國別妻上來時歌或本歌……一〇三
〔卷二・一六八〕日並皇子尊殯宮之時作歌（一）……一〇五
〔卷二・一六九〕日並皇子尊殯宮之時作歌（二）……一〇七
〔卷二・一七〇〕日並皇子尊殯宮之時作歌或本歌……一一一
〔卷二・一九五〕獻泊瀨部皇女忍坂部皇子歌……一一三
〔卷二・一九七〕明日香皇女木𤇾殯宮之時作歌（一）……一一八
〔卷二・一九八〕明日香皇女木𤇾殯宮之時作歌（二）……一二二
〔卷二・二〇〇〕高市皇子尊城上殯宮之時作歌（一）……一二三
〔卷二・二〇一〕高市皇子尊城上殯宮之時作歌（二）……一二六

〔卷二・二〇八〕妻死之後泣血哀慟作歌（一）……一四〇
〔卷二・二〇九〕妻死之後泣血哀慟作歌（二）……一四二
〔卷二・二一一〕妻死之後泣血哀慟作歌（三）……一四四
〔卷二・二一二〕妻死之後泣血哀慟作歌（四）……一四七
〔卷二・二一四〕妻死之後泣血哀慟作歌或本歌（一）……一五二
〔卷二・二一五〕妻死之後泣血哀慟作歌或本歌（二）……一五四
〔卷二・二一六〕妻死之後泣血哀慟作歌或本歌（三）……一五五
〔卷二・二一八〕吉備津采女死時作歌（一）……一五七
〔卷二・二一九〕吉備津采女死時作歌（二）……一六二
〔卷二・二三一〕讃岐狹岑島視石中死人作歌（一）……一六八
〔卷二・二三二〕讃岐狹岑島視石中死人作歌（二）……一七二
〔卷二・二三三〕在石見國臨死時自傷作歌……一七四
〔卷三・二三五〕天皇御遊雷岳之時作歌……一八八
〔卷三・二四〇〕長皇子遊獵路池之時作歌……一九六
〔卷三・二四一〕長皇子遊獵路池之時作歌或本歌……二〇一
〔卷三・二四九〕羇旅歌八首（一）……二〇三

〔卷三・二五〇〕羈旅歌八首（二）……二一一
〔卷三・二五一〕羈旅歌八首（三）……二一七
〔卷三・二五二〕羈旅歌八首（四）……二二八
〔卷三・二五三〕羈旅歌八首（五）……二三四
〔卷三・二五四〕羈旅歌八首（六）……二四六
〔卷三・二五五〕羈旅歌八首（七）……二五五
〔卷三・二五六〕羈旅歌八首（八）……二六二
〔卷三・二五六〕羈旅歌八首（八）一本歌……二六八
〔卷三・二六二〕獻新田部皇子歌……二七三
〔卷三・二六四〕從近江國上來時至宇治河邊作歌……二八〇
〔卷三・二六六〕「淡海乃海夕浪千鳥」……二九一
〔卷三・三〇三〕下筑紫國時海路作歌（一）……三〇一
〔卷三・三〇四〕下筑紫國時海路作歌（二）……三〇五
〔卷三・四二六〕見香具山屍悲慟作歌……三一三
〔卷三・四二八〕土形娘子火葬泊瀬山時作歌……三二四
〔卷三・四一九〕溺死出雲娘子火葬吉野時作歌（一）……三二九

〔卷三・四三〇〕 溺死出雲娘子火葬吉野時作歌（二）……三三一
〔卷四・四九六〕 「三熊野之浦乃濱木綿」……三三四
〔卷四・四九七〕 「古爾有兼人毛」……三三九
〔卷四・四九八〕 「今耳之行事庭不有」……三四二
〔卷四・四九九〕 「百重二物來及毫常」……三四四
〔卷四・五〇一〕 「未通女等之袖振山乃」……三五六
〔卷四・五〇二〕 「夏野去小牡鹿之角乃」……三五九
〔卷四・五〇三〕 「珠衣乃狹藍左謂沈」……三六一
〔卷二・二〇三〕 高市皇子尊城上殯宮之時作歌或書歌……三六六
〔卷九・一七一〇〕 「吾妹兒之赤裳泥塗而」……三七〇
〔卷九・一七一一〕 「百傳八十之島廻乎」……三七一
〔卷九・一七六二〕 詠鳴鹿歌……三七三
〔卷十五・三六一一〕 七夕歌……三七五

人麿長歌評釋……三七九
長歌小感……三八一
〔卷一・二九〕 過近江荒都時作歌……四一六

〔卷一・三六〕 幸于吉野宮之時作歌（一）……四四七
〔卷一・三八〕 幸于吉野宮之時作歌（二）……四七一
〔卷一・四五〕 輕皇子宿于安騎野時作歌……四九七
〔卷二・一三一〕 從石見國別妻上來時歌（一）……五一一
〔卷二・一三五〕 從石見國別妻上來時歌（二）……五三六
〔卷二・一三八〕 從石見國別妻上來時歌或本歌……五六〇
〔卷二・一六七〕 日並皇子尊殯宮之時作歌……五六六
〔卷二・一九四〕 獻泊瀨部皇女忍坂部皇子歌……五九八
〔卷二・一九六〕 明日香皇女木瓜殯宮之時作歌……六一五
〔卷二・一九九〕 高市皇子尊城上殯宮之時作歌……六四八
〔卷二・二〇七〕 妻死之後泣血哀慟作歌（一）……七一〇
〔卷二・二一〇〕 妻死之後泣血哀慟作歌（二）……七四
〔卷二・二一三〕 妻死之後泣血哀慟作歌或本歌……七七七
〔卷二・二一七〕 吉備津采女死時作歌……七八三
〔卷二・二三〇〕 讃岐狹岑島視石中死人作歌……八〇一
〔卷三・二三九〕 長皇子遊獵路池之時作歌……八二六



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〔巻三・二六一〕 獻新田部皇子歌……八三七
〔巻九・一七六一〕 詠鳴鹿歌……八四五
〔巻三・四三三〕 石田王卒之時山前王哀傷作歌……八五〇
附錄……八五五
藤原宮之役民作歌〔巻一・五〇〕……八五七
藤原宮御井歌〔巻一・五二―五三〕……八九二
皇子尊宮舍人等慟傷作歌二十三首〔巻二・一七一―一九三〕……九一九
後記……九七九

# 評釋篇　卷之上

# 自序

本卷は、「柿本人麿評釋篇」の上半をなして、萬葉集中、柿本朝臣人麿作歌、柿本朝臣人麿歌と題詞にある長歌短歌、右柿本朝臣人麿作、或云柿本朝臣人麿作と左注のある長歌短歌を評釋したものである。

附錄に、藤原宮之役民作歌、藤原宮御井歌一首幷短歌、日並皇子尊宮舍人等慟傷作歌二十三首の評釋を加へた。此等は共に作者の不明なるものであるが、人麿と作歌的關係が存するだらうといふ說を顧慮したためである。

評釋の初の意圖は、總論篇所收の「柿本人麿私見覺書」といふ文章の終りに、短歌のみ若干首を選釋して附けるつもりであつたが、ついで增補の意欲を感じ短歌の全部を評釋しようと思ひ立つに至つた。それゆゑ私の爲した人麿短歌評釋は、昭和三・四年の交から五・六・七年あたりに書いたものもあり、大多數は昭和八年の春から昭和八年歲末に至るまでに書き畢へて、直ぐ印刷所にまはしたものである。それから、初の評釋計畫は長歌全部を除去するつもりであつた。私は

これまで一篇の長歌をも作つたことがない、その力量を以て長歌を云々することは不可能だと思惟したからである。然るに土屋文明・武田祐吉二氏は、人麿を評釋するに長歌を除去してしまふことはその結果の薄弱なるべきを云はれたので、昭和十年七月下旬から長歌評釋に著手し、同年十二月三十日に書き畢へるに至つた。本卷の體裁が短歌評釋、長歌評釋と分離したるは是の由緣に本づいてゐる。長歌の評釋は、山田孝雄博士の萬葉集講義に負ふところが特に多い。

評釋は、題意、語釋、大意、鑑賞の四つに分けてゐるが、初期に書いたものにはさういふ區分が無く、かたがた體裁が統一してゐない。また私自身の好みとしては、寧ろさういふ區分を欲しないのだけれども、今は繁雜を避くべき區分の便法に隨ふこととした。

語釋には、能ふかぎり學說文獻の記載に努めた。これは一は萬葉學發展の徑路を追尋することともなり、一は先賢の學德を敬慕することともなるためである。從來の諸注釋書ややともすれば、この記載を怠つた觀があるのを見て、敢てこの實行を試みた。例へば、依羅娘子の歌の、『石川貝』は『石川峽』の意だとする說は、橘守部、近藤芳樹の順序に記載したるが如きである。そして、『東野炎』を『ヒムガシノヌニカギロヒノ』と訓ませた等、定說にまで善導した學者の名は、これを崇んで後進の心中に常住せしむべきだと謂つた如きである。併し參考した注釋書に限があり、雜誌所載の論文等に見落があることとおもふから補充せられむことを希ふ。

語釋に當つて、同語の用例を並べ記し、幾度か重複するのをも厭はなかつたのは、この評釋の目的を常に作歌實行の修練と分離せしめざらむと思つたためである。斯くのごとくにして、全貌極めて煩瑣繁縟のものになつたが、今や奈何ともなし難い。

大意の項は、必ずしも口語に直譯したものではなく、大體の意味を記すにとどめて置いた。短歌の部に於いてその傾向が著しいが、長歌の部では口語に直譯しようと試みたところが多いやうである。

鑑賞の項に於ては、鑑賞の記述は、願はくは人麿作歌衝迫の忠實な解明として役立たしめたいと欲したのであつた。けれども、これとて所詮一の我見に極まるべく、現代の一歌人が人麿の作つた古歌を對象として、放肆な一家の見を縷述したといふことになるのであらうか。

この評釋を爲したとき、殆ど盡く先進の學說から恩賴を蒙つた。從つて自力の新說といふやうなものは皆無だと謂つて好く、偶有るも皆覺束ないもののみである。さういふ風に私に影響を與へた先進の名はその個處個處に記して置いたが、なほ、鴨山考・辛乃崎考等の場合に盡力せられた人々の名をもその個處個處に記して置いた。その他種々の點について助力せられた先輩諸友のことはこれを補遺篇に纏め記して感謝せむとおもふ。

短歌評釋參考の項に、外國人の手に成つた外國語翻譯を記して置いたのは、他意あるのではな



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com